

# 東日本支部だより

2022 年 3 月 5 日発行

Newsletter of the East Japan Chapter, the Society for Research in Asiatic Music

## 今後の例会予定

第 126 回 定例研究会

2022 年 3 月 12 日(土) オンライン開催

卒論・修論発表(その 1)

第 127 回 定例研究会

2022 年 4 月 9 日(土) オンライン開催

卒論・修論発表(その 2)

第 128 回 定例研究会

2022 年 6 月 4 日(土) オンライン開催

博論発表

※詳細は下記↓↓(■定例研究会のお知らせ■)をご覧ください。

※なお、本例会は当日に発表、質疑応答ともにおこないます。

## ○卒業論文発表(その 1)

1. 子供のための長唄作品の誕生—童謡運動期前後における長唄界の動向から—

泉頭 花(東京藝術大学)

2. オーディオドラマの「音」に関する研究—効果音と音楽の機能を中心に—

内城 菜々子(東京藝術大学)

3. 新潟市における樽砵の変容

坪内 香澄(国立音楽大学)

## ■定例研究会のお知らせ■

### ◆東日本支部 第 126 回定例研究会

時 2022 年 3 月 12 日(土) 13:00~16:15

所 Zoom によるオンライン開催

※初めて Zoom 例会に参加される方へ:

参加には Web カメラとマイクのついた PC、またはタブレット、スマートフォンが必要となります。

参加方法 事前申込制: 東洋音楽学会東日本支部のウェブサイトから事前に参加をお申し込みください。

<http://tog.a.la9.jp/higashi/index.html>



申込締切 3 月 8 日(火)

申込み後、折り返しミーティングコード等をお送りします。

## ○修士論文発表(その 1)

4. 長唄《越後獅子》の楽曲の構造—他種目からの旋律の「引用」に着目して—

向田 瑞貴(お茶の水女子大学大学院)

5. 紀元二千六百年奉祝における国民歌の普及・受容について

中山 恵理那(お茶の水女子大学大学院)

6. 成田山新勝寺表参道のサウンドスケープ—「台ノ坂」で日常的に聴取される音と人の往来の関係性—

神田 花菜子(お茶の水女子大学大学院)

7. 20 世紀初頭における清国留学生・曾志恣の音楽思想と実践

郭 君宇(東京藝術大学大学院)

8. 劉文金作曲二胡協奏曲《長城隨想》における「韻」の探究

陳 柳伊 (東京藝術大学大学院)

司会 井上 貴子 (大東文化大学)

## ○修士論文発表 (その2)

3. 唐代燕楽の箏と平安時代の雅楽の楽箏の比較

— 一日中両国の音楽受容の考察を通して —

李 嫣寒 (国立音楽大学大学院)

4. 変革期における生田流箏曲—葛原勾当を中心に—

ネヴェス・フェルナンド (東京藝術大学大学院)

5. 蕭友梅の滞日中の活動再考—新資料に基づく分析—

卓 詩穎 (東京藝術大学大学院)

6. 山田耕筰の初期歌曲作品について

— プロソディ解析から見える楽曲構造の変遷 —

服部 葉子 (東京藝術大学大学院)

7. 千葉県の三匹獅子舞の音楽的系譜

— 楽器の分布と「おかざき」に焦点を当てて —

村岡 南 (東京藝術大学大学院)

8. 中部ジャワの芸術大学におけるダランの教育—インド

ネシア国立芸術大学スラカルタ校 (ISI Surakarta) にお

けるカリキュラムの変遷とその影響—

岸 美咲 (東京藝術大学大学院)

9. 日本と中国の横笛の比較研究

— 篠笛と笛子を中心に —

馮 蕊 (洗足学園音楽大学大学院)

## ■定例研究会のお知らせ■

### ◆東日本支部 第127回定例研究会

時 2022年4月9日(土) 13:00~16:45

所 Zoomによるオンライン開催

※初めてZoom例会に参加される方へ:

参加にはWebカメラとマイクのついたPC、またはタブレット、スマートフォンなどが必要となります。

参加方法 事前申込制: 東洋音楽学会東日本支部のウェブサイトから事前に参加をお申し込みください。

<http://tog.a.la9.jp/higashi/index.html>



申込締切 4月2日(土)

申込み後、折り返しミーティングコード等をお送りします。

※なお、本例会は当日に発表、質疑応答ともにおこないません。

## ○卒業論文発表 (その2)

1. コンスタンティン・ブライロイユ(1893~1958)による  
民俗音楽研究再考

石井 亜季 (東京藝術大学)

2. 越後瞽女唄と民謡の関係性—《越後追分》の歌詞、  
旋律に着目して—

齋藤 穂歌 (東京藝術大学)

司会 東田 範子 (東京藝術大学)

## ■定例研究会の報告■

### ◆東日本支部 第124回定例研究会

時 2021年12月4日(土) 14:00~16:30

所 Zoomによるオンライン開催

司会 デュラン、ステファン・アイソル(東京藝術大学)

### <第38回田邊尚雄賞受賞記念講演>

#### 1. ヒンドゥー賛歌の「価値」に関する一考察

—南インドのバラモン階層との関係に着目して—

小尾 淳 (大東文化大学) (傍聴記: 寺田吉孝)

(発表要旨)

本発表では拙著『近現代南インドのバラモンと賛歌—バクティから芸術、そして「文化資源」へ』(青弓社、2020年)を基に南インドのバラモン階層と音楽との親和性を歴史的根拠とし、ヒンドゥー賛歌が彼らにとっていかなる力をもってきたかを考察した。

インドのヒンドゥー社会では音楽と信仰が強く結びつき、時代・地域によって名称も形式も異なる多彩な賛歌が蓄積されてきた。本書の舞台となる南インド、タミル・ナードゥ州では年間を通してヒンドゥー文化に根差した宗教音楽実践が見られ「神を称える」宗教歌謡が生活に息づいている。近代化以降「芸術」として成立した南インド古典音楽(カルナータカ音楽)の楽曲も、歌詞の側面から見れば広義の「賛歌」とみなすことができる。

したがって、古代より司祭階級として宗教的側面を担うバラモン階層が音楽と深く関わってきたことは自然の帰結であった。無論、複数の音楽コミュニティが相互関与しながらカルナータカ音楽の発展に貢献してきたことに疑いはないが、20世紀初頭にバラモン・エリートによって設立された音楽研究機関やカルナータカ音楽を代表する「三楽聖」が全員バラモンであったことなどからも、音楽界がバラモン主義的なイメージ

を纏ってきたことは否めない。

他方、タミル地方では20世紀初頭から高揚した民族運動を背景に、長年にわたり鬱積した反バラモン感情が高まると同時に同地方特有の言語問題も絡み、タミル・ナショナリズムが音楽界にも波及していく。そのような中で同地方のバラモンは生きづらさを抱えながら彼らの拠り所となる音楽や宗教実践を推進し、最後の砦ともいえる文化的・宗教的領域を堅守した。本発表では彼らが牽引してきた「楽聖のアーラーダーナー」と「賛歌の伝統」という2つの事例から考察し、ヒンドゥー賛歌に生成した3つの価値を指摘した。

南インドのバラモン階層は、なぜ変化する社会状況のもとで賛歌詠唱の伝統を継承してきたのか。彼らはこの伝統にどのような価値を見出してきたのか。講演では、これらの問いに対する発表者の長年にわたる研究の成果が、わかりやすく解説された。特に、バラモン階層の視点に立った先行研究は少ないという指摘は的確かつ重要である。本研究は、その間隙を埋めるために、賛歌の詠唱を19世紀末以降の「反バラモン感情」の高まりに対する一種の生存戦略として捉え、その活動を彼らの視点から捉えようとする意欲的な挑戦であると感じた。バラモン達の実像は、彼らが音楽文化の中で獲得した支配的位置ゆえに見えにくい。その姿を可視化することは、音楽文化における彼らの位置付けだけでなく、より広く南インドの社会関係を理解する上でも有効な手段になると考えられる。この点からも、バラモン達のエイジェンシーに軸足を置いた本研究は、先駆的な試みとして記憶されるであろう。今後のさらなる深化と発展を楽しみにしたい。

2. 『江戸中期上方歌舞伎囃子方と音楽』の課題と検証 紀の文化東漸とその還流という文化動態現象を上方歌舞伎  
前島 美保 (東京藝術大学) 囃子方と音楽の側面から見定めた一書ということができよう。

(発表要旨)

本書は、2012年東京藝術大学に提出した博士論文「十八世紀上方歌舞伎音楽の研究—囃子方を中心に—」に改題と改訂を施し、資料篇を新たに加えて2020年に刊行したものである。座付きの歌舞伎囃子方に関する歴史研究は、主に江戸を対象にこれまで進められてきた。近年、上方(京・大坂)に蓄積が見られるものの、江戸中期すなわち十八世紀については未だ通史がない。本書はこの点に着目し、江戸中期上方歌舞伎囃子方の変遷とその音楽について、顔見世番付等の一次史料に基づき解明したものである。

本講演では、先行研究の整理と本研究の目的等について述べた序論、および十八世紀前半(寛延以前)の囃子方に触れた第一部第一章を中心に内容を紹介しながら、執筆過程で出来た課題も含めて検証した。また、本書執筆後に入手した新出史料にも言及した。

寛延以前には417名の囃子方がおり、岸野次郎三郎、山本喜市らの上方出身の名うての囃子方が、初代坂田藤十郎や初代芳沢あやめといった当代随一の役者と同座して上方歌舞伎を支えていた。唄方は小歌と呼称されており、中には屋号で芝居に出勤している者や能の囃子方を兼ねる者、囃子方として修業したのちに歌舞伎役者となる者、日蓮宗徒の目立つ劇界など、専門的・職業的囃子方としての途上段階や、中世と地続きの環境を見て取ることができる。この頃の上方の囃子方の影響力に関しては、坂田兵四郎の江戸下りによってもたらされた変化に焦点を当て検討した。具体的には江戸における長唄正本の刊行とその音楽表記についてだが、上方と江戸の囃子方の交流によって多彩な音楽演出への契機が生まれていたことを指摘した。

上方の囃子方は宝暦期前後でその性格が変わると考えられ、十八世紀後半には江戸の囃子方の影響力が強まる。本書ではこうした変遷にも触れているが、換言するなら、十八世

(傍聴記:黒川真理恵)

前島氏の講演は、著書『江戸中期上方歌舞伎囃子方と音楽』(文学通信、2020年)の第38回田邊尚雄賞受賞を記念して行われた。前島氏に心からの祝意を申し上げたい。

発表は、著書のなかから「序論」と「第一部第一章」を中心に進められた。上方の歌舞伎興行の特徴として、囃子方の座組が流動的である点や、姓と芸系を把握しにくい点があったとのことである。研究の困難さとともに、前島氏の丁寧な仕事ぶりが伝わる発表だった。今後の展望としては、作品ごとの音楽演出の変遷等を明らかにしていきたいとのことだった。

質疑応答では、デュラン・ステファン氏から、囃子方に日蓮宗徒が多かったことについて質問があった。前島氏からは、検討を要するとしつつも、狂言作者にも熱心な宗徒がいたことや、音楽演出や黒御簾音楽に影響を及ぼした可能性について回答があった。なお、前島氏より、著書の正誤表を文学通信のホームページで公開しているとの補足説明があった。

## ◆東日本支部 第125回定例研究会

時 2022年2月5日(土) 14:00~16:50

所 Zoomによるオンライン開催

司会 海野 るみ

### <研究発表>

1. 今藤流長唄三味線演奏家の駒と音色に対するこだわりについて—他流派および他の三味線音楽ジャンルとの比較を通じた特徴の検討—

岩崎 愛 (国立音楽大学)

(発表要旨)

三味線の初学者にとって、三味線を演奏できる状態にセッティングすることは難しい。楽器を組み立てることはもちろん、糸を張る、駒を設置するといった作業は、経験を必要とする。なかでも駒は、音色を調整するために非常に重要な役割を果たしており、高さや形、重さや材質はもちろん、設置位置も音色に大きな影響を与える。状況に応じた駒の選択や設置位置の調整は演奏家の間では暗黙の了解となっているが、初学者の使用する教則本にはこれらに関してわずかな記載しかなく、また、研究においても駒に注目したものは管見の限り見当たらない。そのため、適切な駒の取り扱いについては、師匠からの口頭伝承で学ぶ以外ほとんど方法がないといえる。そこで報告者は、長唄三味線演奏家が理想的な音色を得るために行なう駒の工夫を博士論文のテーマとし、研究調査を進めている。

本報告では、これまでに行なった聴取実験、聴取実験に基づく音響分析とインタビュー調査、および現在行なっている文献調査について報告し、それらの結果から今藤流長唄三味線の駒に関する特徴を考察することを試みた。聴取実験、および音響分析からは、長唄三味線演奏家にとって好ましい音は胴から駒までの距離がおおよそ 28 mm から 34 mm の音に集中し、43 mm 以上離れた音は好ましくないと判断されること、また、好ましくない音の特徴の一つに、音の減衰部分に不規

則な波が現れることがわかった。さらに、インタビュー調査と文献調査からは、今回扱った中で最古の文献が執筆された当時(1923年)から現代に至るにつれて、長唄三味線演奏家が使用する駒の高さが次第に低くなっていることが見て取れた。また、駒の幅も音色に影響を与え、時代によって異なっている可能性が示唆された。なお、現段階では駒の特徴について今藤流と他流派との大きな差は見られなかった。

今後は、倍音や部分音なども含めた音響分析を行なうこと、また、演奏者の性別や年齢による身体的な違いや、皮の張り具合などの楽器の状態を含むさまざまな条件と駒の選択や設置位置との関係について、歴史的な変化も含めてさらに調査を進めることを課題としたい。

(傍聴記:配川美加)

発表者が研究テーマとする「三味線の駒」は三味線の音色に関わるたいへん重要な要素で、発表、及びその後の質疑応答から、駒に関する多くの情報を得ることができた。発表者は駒の工夫について、長唄三味線における駒の位置とその音響特性に関する音響実験に始まり、今藤流の演奏家を対象とする聴取実験とインタビュー、文献調査と様々な方法で研究を進めてきた。今藤流の特徴の解明が一つの課題となっているが、それには、研究対象を長唄の各流派に広げる必要があり、発表者は既に文献調査でそれを行ってきたが、質疑応答にもあったように、今藤流以外の演奏家への聴取もぜひ進めてほしい。質疑応答では、吾妻ザワリの場合の駒へのこだわりや、駒とハの高さとの関係性を明らかにする、演奏者の駒の形状を計測などにより詳しく調査する、などの方法が提示された。さらに、駒の位置と胴板の厚みの個体差との関わり、駒の工夫は演奏する場所の密閉度などにも関連するのではないか、などの指摘もあり、今後の研究の進展が増々楽しみになった。

## ＜共同研究報告＞

### 2. 伝統芸能における身体技法の教授の場を考える

小塩さとみ(宮城教育大学)  
金光真理子(横浜国立大学)

増野亜子(東京藝術大学非常勤講師)  
山本百合子(福岡教育大学、西日本支部)

(発表要旨)

芸能を教え伝えることは身体技法を教授することである。音楽であれ舞踊であれ、学習者が曲を習う時には、旋律やリズムや踊りの振り等を身体の使い方とともに覚えていく。身につけた身体技法は鑑賞の基盤としても機能する。音楽や芸能を理解する上で身体技法は欠くことができない要素である。

身体技法の教授法は音楽文化や芸能ジャンルによってどう異なるのか。教授者と学習者が対面する伝統的な稽古の場と、ワークショップや学校の授業等の新しい教授の場で、身体技法の教授に関する意識の違いはあるのか。本発表はこのような問題意識に基づいて2019年より実施している科研費研究の中間報告である。新型コロナウイルスの感染拡大が芸能教授の現場に与えた変化についても言及した。

冒頭で発表の枠組を示した後、まず山本が「日本の伝統芸能の地域における教習と普及」と題して、長崎県島原市で2004年より継続的に実施されている「島原子ども狂言」を取り上げ、1年を1サイクルとし、個人稽古ではなく集団で教習するという特色を紹介した。あわせてこの教習事業が地域社会の人材育成と深く関わっていることやコロナ状況下での課題についても報告した。

次に小塩が「短期間でいかに何を教えるか」と題して、2012年より毎年夏に実施されている宮城県仙台市の「こどものための能講座」の活動と、宮城教育大学でのガムランの授業について報告した。前者は5回の稽古と発表会、後者は4日間の集中講義である。未経験者を主たる対象とした短期間の教習プログラムでの教授者の工夫と、受講者がそこから何を得ているかについて紹介した。

続いて増野が「日本におけるインドネシア音楽と舞踊のオンライン教授」と題し、大学の授業と民間レッスンの指導者への聞き取り調査の報告を行った。ガムランと舞踊、ジャワ芸能とバリ芸能に固有の身体技法の教授方法、オンライン化の課題と利点を、指導者がどのように捉え、どのように対応したかを報告した。

最後に金光が「大学のオンライン実技授業座談会」と題して、科研費グループとして2020年秋に実施した8回の座談会で語られた実践例を整理し、オンライン実技レッスンの難しさが「学び」や「演奏」における身体性を顕在化したこと、オンデマンドの配信動画は教習内容をリスト化し学びのプロセスを「見える化」したものであると考察した。

(傍聴記:前原恵美)

伝統芸能は、ジャンルにより占める割合や内容の違いはあっても、いずれも身体運動を伴う。本報告では、新型コロナウイルス禍で変化を余儀なくされている現状も踏まえつつ、伝統芸能における身体技法の教授のさまざまな「場」の事例が報告された。各報告はそれぞれ示唆に富んでいたが、紙面に限りがあるので2点のみ挙げる。

山本氏は、地域での伝統芸能の教習を地域行政(島原市教育委員会)の事業として継続する「島原子ども狂言」を取り上げた。ここでは、ご当地創作狂言作品を通じて伝統芸能を地域に浸透させる取り組みが興味深かった。古典芸能などの伝統芸能は、ある意味で地域を超えた普遍性を備えているので、地域の教授の場で根付くために工夫が必要な場合がある。伝統芸能ゆえに、どのような地域でもご当地に寄り添う作品を創出し得るといふことに、改めて気付かされた。

増野氏は、インドネシアの音楽と舞踊の日本でのオンライン教授について報告した。合奏においてこそ自分の演奏する楽器が意味づけられるガムラン音楽にとって、合奏できないオンライン教授には自ずと限界がある。受講者が楽器を持っている可能性も、学校教育であれ民間レッスンであれ、低い。そうした中で、同時に「合奏できない」ことは「教授者の模

做を繰り返す」ことで、「楽器がない」ことは「声や身体で代用する」ことで、教授方法が工夫されているという。こうした方法は、対面教授が可能になるまでの「つなぎ」と捉えることもできようが、今回のような新型コロナ禍では、まず「教授の場を止めない」（伝承を止めない）ために必要だろうし、対面の教授が可能になった際に、予想外の効果を挙げている可能性も大いにあろう。

フロアからは、「島原子ども狂言」の受講者の属性について質問があり、山本氏は、市のHP等で広報し、これまで申込者全員を受け入れていると回答した。多様な教授の「場」を対象としているゆえに、今後、教授者と教習者の属性、教授の場の環境など、多様な場を比較するための統一的な視座が定まった、全体を俯瞰するような報告にも期待したい。

## ■会員の声 投稿募集■

1. 次号締切: 2022年5月20日 (6月下旬発行予定)

2. 原稿の送り先および送付方法:

東日本支部事務局

E-mail: [tog.higashi@gmail.com](mailto:tog.higashi@gmail.com)

3. 字数・書式: 25字×8行以内(投稿者名明記のこと)

4. 内容:会員の皆様に知らせたいと思う情報

(1) 催し物・出版物などの情報

研究会、講演会、演奏会、CD、DVD、書籍出版、展示、見学会などの情報。

(2) 学会への要望や質問

支部例会、大会、機関誌など、学会に対する感想や要望。

※原稿の採否は「支部だより」担当者にご一任下さい。編集の都合上、お送りいただいた原稿に多少手を加えさせていただくことがありますので、ご了承ください。

(東日本支部だより担当)

## ■定例研究会発表募集 (7月例会)

東日本支部では、会員の皆様による活発な研究活動のため、定例研究会での研究発表を募集しております。

発表をご希望の方は、発表種別(研究発表・報告等)、発表題目、要旨(800字以内)、発表希望月、氏名、所属機関、連絡先(住所、電話、Fax、E-mail)を明記したファイルを添付の上、4月30日までに東日本支部事務局にメールにてお申込みください([tog.higashi@gmail.com](mailto:tog.higashi@gmail.com))。発表希望を提出後、1週間経ても東日本支部事務局から連絡がない場合には、メール事故等の可能性がありますので、お手数ですが再度ご連絡ください。

なお、7月例会を含めて2022年12月までの全例会は、原則オンライン開催を継続する方針ですので、ご了承いただければ幸いです。

## ■編集後記■

今月号支部だよりでは、12月と2月の報告をお届けします。  
東日本支部では、今後も研究発表や企画など皆様からの  
お申し込みをお待ちしております。本誌での「会員の声」にも  
情報をお寄せいただき、積極的にご活用ください。次号の発  
行は6月下旬を予定しております(MK)。

\*\*\*\*\*

発行：一般社団法人 東洋音楽学会 東日本支部

編集：尾高暁子、奥山けい子

倉脇雅子、齊藤紀子、佐藤文香

〒110-0005 東京都台東区上野 3-6-3 三春ビル 307 号

東洋音楽学会東日本支部事務局

E-mail: tog.higashi@gmail.com

\*\*\*\*\*